

子ども期の回想にみる現代青年の親子関係

大阪学院大学 莊 巖 舜哉
関西学院大学 莊 巖 (赤尾) 依子

How Youth Evaluates Parents-child Relationships During Their School Age

Osaka Gakuin University SOGON, Shunya
Kwansei Gakuin University SOGON, AKAO, Yoriko

現代青年が子ども時代にどのような親子関係にあったのか、学生の回想をもとに分析した。男子学生は勉強に関連して父親から叱られ、次いで生活態度に関連した内容で叱られていた。女子学生は、父親からも母親からも、生活態度に関連した内容で一番多く叱られ、母親からは家事や手伝いに関連した内容でも叱られていた。男子学生は、家事や手伝いに関連して叱られることが少なかった。男女とも、総度数から見ればほめられることが少なく、叱られることの方が多かったが、女子学生は父親から勉強関連で男子学生よりもほめられていた。父親の年齢を50歳以上と以下に分け、しつけの内容を検討したところ、50歳以下の父親は、家事・手伝いに関連した内容で子どもに多くの注意を与えていた。ほめる行動において、50歳以下の父親が勉強関連で子どもをほめており、50歳以下の男性を配偶者とする母親も、勉強で子どもをよくほめていた。ほめられた記憶がないと回答した学生の父親は、50歳以上に多かった。母親からほめられた記憶がないと回答した学生は、50歳以上の男性を配偶者とする母親の子どもに多かった。男子学生の父子/母子コミュニケーション量は高校時代に最低となり、女子学生は中学時代に最低と回想した。親と寝室を別にした年代は、男女とも小学校入学を契機とした時期が一番多かった。

【キー・ワード】親子関係、性差、しつけ、社会化、親の年齢

Parents-child relationships during school age were investigated, based on the memory of University students. Male students were often scolded regarding their school works and/or their living/life styles by their fathers. Female students were often scolded regarding their living/life styles from by both parents, and they were also scolded regarding domestic helping by their mothers. In contrast, male students were not scolded regarding domestic helping by both parents. Both male and female students have fewer experiences of praise and admiration than of scolding. Regarding school work, only female students reported that they had much experience of admiration by their fathers.

The father's age effect on child discipline was examined. Students were divided into two groups,

those having fathers over 50 years old and those having fathers under 50 years old. Students with fathers under 50 years old fathers were often scolded regarding about daily living. In contrast, these same students were praised more for their school work than the students who had fathers over 50 years old. The same tendency was found with the mothers who had husbands under 50 years old. Students who did not experience praise were significantly found in the cohort of over 50 years old fathers. The same tendency was found with the mothers who had husbands over 50 years old.

Regarding the father-son communication, it was the lowest when sons were high school students, and father-daughter communication was the lowest when they were junior high school students. Mother-son communication was the lowest when they were high school students, and mother-daughter communication was lowest when they were junior high school students. Over the 30% of boys and girls separated their bedroom from their parents' when they were 6 years olds.

【Key Words】 Parents-child relationships, Gender difference, Discipline, Socialization, Parental age

はじめに

平成 13 年度版青少年白書の第 1 章は、青少年の意識や行動に関する調査報告に当てられている。そこに報告されている中から今回の調査に関連する主な数値を上げるならば、例えば父親とよく話をするとして答えている小学生は 55.7%、時々が 29.4%で、合計すると 85.1%の子どもが父親とのコミュニケーションは密であると答えている。同じ質問が母親に対してもおこなわれているが、これは合計で 97.4%になり、内容は別として小学生は、親と頻繁にコミュニケーションがあると思っていることがわかる。

では中学生はというと、父親と時々以上のコミュニケーションがあると答えたものが 82.9%で、小学生時代より僅かに低下する。このような調査に主観が入ることは避けられないが、報告されたコミュニケーション量を見る限り、父子関係は健全に維持されているといえよう。母親との関係も同様であり、96.3%が時々以上のコミュニケーションを維持している。

親を尊敬するかという設問に対し、小学生はあてはまるが 44.7%、まあまあが 34.0%であるから合計で 78.7%が肯定的評価を与えており、中学生でもその比率は 77%に上る。親のいうことは正しいと考える子どもたちも小学生で 79%、中学生でも 67.9%がまあまあ以上と回答しているのである。

このように白書に表された数値だけを見ると、現代の家族はいかにも健全であるように見えるのだが、実は家族機能の低下や崩壊が言われはじめて久しい。子どもの塾通いや主人の遅い帰宅などの理由で、家族の食事時間はバラバラであるし、休日は起床時間が違ったり、TV を見ながらの夕食は会話も少ない。食事が終わると子どもたちはそれぞれ自分の個室に閉じこもり、好きな TV を見たりゲームをする。就寝前も両親に挨拶するでもなしに、そのままベッドにもぐりこむ。朝、母親に起こさ

れ、おはよの挨拶もなしに学校に行く子どもも多い。両親は学校の成績には敏感であるが、個室で子どもがどのように過ごしているかは無関心である。父親とはすれ違いが多く、1週間、父の顔を見ない子どももいる。これが日本の家族の現状なのである。

そのことは家庭教育の極端な貧困という事実に反映されている。平成12年3月に発表された、日本・韓国・アメリカ・イギリス・ドイツ5カ国の国際比較では、日本の子どもは家事の手伝いをせず、親は子どもにしつけをせず、道徳観や正義感も比較5カ国中最低で、逆に学校の規則を破ったことがあるのは最高という結果が報告されているのである。人間関係を避ける傾向も、日本の子どもには強い。生活体験等に関する項目では、例えば魚釣りや昆虫採集の経験が一番多いことになっているが、これについても夏休みの宿題などが関与している可能性があり、日本の子どもたちが他国の子どもたち以上に、自然環境の中で生き生きと遊び回っていることを示すものではない。

これらの事実から浮かび上がってくる子ども像、あるいは家族像は、互いに分断されながらも表面上はつながっている、実に関係性の希薄な像でしかない。そこで今の大学生たちが子ども時代、親とどのような関係があったのかということ調査しておく必要性を感じた。家族像は時代を反映しているからである。

問 題

戦後初めて青少年に関する白書が出版されたのは昭和31年である。以下、必要な場合は西暦年を1956のように併記するが、この年のみ「青少年児童白書」という名称で刊行された。31年はまた、「もはや戦後ではない」という文言が経済白書の中で使われた年でもあるが、その言葉どおり、翌32年には神武景気を迎える。このころから家族関係や親子関係は大きく変容し始めるが、あたかもそれを見越したかのように、最初の「青少年に関する世論調査」がこの年に実施された。36都市・90町村から無作為に抽出された17歳から23歳の3,000名を対象とした調査である。

白書は両親の子どもに対する態度を4類型、すなわち民主型(父親41%、母親51%)、溺愛型(父親12%、母親23%)、専制型(父親15%、母親12%)、無関心・放任型(父親11%、母親5%)、その他に分類する。この分類はその後も多く調査で使われており、現代にも通用する類型である。同調査では自分の家庭の雰囲気について、満足と大体満足を含めて79%の青少年が肯定的回答をしているが、低所得階層に多い放任型の家庭では、親しみにくいという否定的評価が多い。

同白書には、青少年のものの考え方として愛国心、親と意見が違った場合、親孝行、意見の発表、生活目標という5項目があるが、親孝行という項目が現代の目から見れば面白い。親孝行の意識は当時未だに濃厚であり、親に心配をかけないようにしたいとか、親を尊敬し愛情を持つとか、もっと親を楽にしてあげたいなどといった好意的な回答が61%を占めている。子どもたちの将来の目標は、「一生懸命働いて経済的ゆとりのある生活がしたい」が39%で第1位、次いで「まじめに働いて人から認められる人物になりたい」が26%、「金や名誉を考えないで、自分の趣味に合った生活がしたい」が22%となっている。第3位の内容は現代青年の願望に合致しており、現実はどうであれ、働くよりもんびりという考え方が昔から一定の支持を集めていることが面白い。

同年の国民生活白書はこの頃の生活を、「先ず何とか食べていくことに始まり次いで衣料を整え、やっとこの四、五年、住居に重心が移ってきた」と述べている（昭和 33 年版国民生活白書）。同書はまた、家電の花形として電気洗濯機、テレビ、冷蔵庫の 3 種類があると指摘するが、昭和 33 年（1958）9 月の消費者動向予測調査では、29.3%の家庭が電気洗濯機を持っており、テレビは 15.9%の家庭に普及していた。その他に電気釜は 15.6%、電話は 17.6%、電気冷蔵庫は 5.5%、ミシンは 66.3%、自転車は 67.3%、ラジオは 91.7%、カメラは 43.1%である。お金を払えば便利な家電製品が手に入るようになり、子どもたちの将来目標は先に述べた「経済的ゆとり」に設定された。

ところが生活白書は昭和 35 年（1960）を境にがらりと記述を違える。それは終戦当時、戦前の 5～6割に落ち込んだ国民所得や消費水準が、この年に戦前水準を 3～4割上回るようになったことで、また当時の池田内閣の所得倍増計画に代表されるように、10年でGNPが倍になるという見通しの下、一挙に経済がテイク・オフの段階に至ったことを背景としている。実際、昭和 36年から 46年に至る 10年間の平均経済成長率は 10.5%を記録し、昭和 42年（1967）には早くも倍増を達成してしまった。その尖兵となったのが“団地族”だったのである。

日本住宅公団の団地が完成して入居が始まったのは昭和 31年（1956）3月、堺市の金岡団地が最初で、当時の家賃は 4000円から 4800円であった。団地族が住んだ公団の甲種団地の建坪は 15.0坪、甲種市街地が 15.5坪、乙種が 14.0坪でしかなく、今から考えれば随分と狭い。しかし同時期の公営 2種住宅で木造建築が僅か 8.5坪しかなかったことを考えれば、広さは倍近くになり、白書は「近代設備が整った耐火構造という質的な面を考慮すれば割安で住宅事情は良好」と自画自賛した。昭和 33年にはこうして団地族と呼ばれる人たちが 100万人を突破した。

このような団地に入居したのは高学歴で、11歳未満の子どもがいる若い家族であった。彼らの所帯は平均 3.5人で形成されていた。子どもが小さいこともあってエンゲル係数は低く、その分、洗濯機や冷蔵庫、電気炊飯器やガスストーブなど、厨房や暖房器具に資金を回すことができ、いわゆる近代的な生活を送ることができる層が誕生したのである。彼らは「月賦販売」などを利用しながら、消費を牽引していった。

家族構造の変化は昭和 35年（1960）にひとつの節目を迎える。1世帯あたりの家族人員は大正から昭和にかけて 5.0前後で安定していたが、30年の 4.97から 35年には 4.56へと急激に落ち込んだ。中でも団地族は平均 3.5人の小家族であった（昭和 35年版国民生活白書）。こうして家族は 2～4人世帯が中心となっていった。また、昭和 25年（1950）に 107%を示した中卒・高卒の農業人口補充率は、この年 32%にまで落ち込み、翌 36年には 19%にまで激減する。田舎から都市への新卒者の移入は、朝鮮戦争特需で都市が復興し始めた昭和 26年以後、間断なく続くのである。

人口移動の最初のピークは昭和 28年（1953）にきた。この年は電化元年ともいわれ、三洋や松下などが大量の家電製品を市場に送り出し始めた年でもあった。つまり都市において若年労働力が大量に必要となり、農村から大量に人口が移動し始めたのである。そうして昭和 35年頃には若者だけではなく、一家全員で都市に移住する家族も多くなり、人口移動はそのピークを迎えた。

こうして都市に移入した新しい住民の多くは夫婦共働きであり、家電製品を購入して家事に割く時間を減少させた。家電製品の多くは月賦販売であったが、35年に「丸井」がクレジットという言葉

を採用し、消費者の間には支払いの分割に対する心理的抵抗が薄れたことが大きい。またこの頃、家事代行サービス業のはしりである貸しおむつ会社も登場し、保育所に預けられる子どもたちが急増した。

昭和 34 年（1959）には文部省調査で、東京都の小学校高学年と中学生の 20%が、一日 5 時間以上テレビを見る「テレビっ子」であることがわかった。テレビが本放送を始めたのは昭和 28 年（1953）であり、当時約 3000 台の受像器しかなかったものが 34 年 10 月には 300 万台を突破した。受像器数が 1000 倍になるのに、僅か 6 年の歳月しか要していないのである。テレビがいかに強い伝播力をもっていたかがこの数値からわかる。しかしそれはまた、親は家事を家電製品に代行させ、子どもは友達ではなくテレビを遊び相手にする時代の始まりでもあった。社会現象的にはこの頃から、「鍵っ子」と呼ばれる子どもたちが増加し始める。

別に鍵っ子だけが非行に走るわけではないが、昭和 33 年（1958）の刑法犯少年は初めて成人を上回り、14 万 5 千人弱が補導を受け、あるいは逮捕された。昭和 36 年（1961）には、成人の犯罪者数が人口 1000 人あたり 7.3 人であったのに対して、少年では 10.5 人と逆転したのである。こうして戦後の少年犯罪は、昭和 26 年と昭和 36 年にそれぞれピークを迎えた。また、犯罪の低年齢化と中流層の子どもの犯罪が増加したこともその特徴であった。26 年（1956）を 100 としたとき、極貧層では指数が 47 に低下したのに対し、中流層のみが 174 と突出しているのである。ちなみに下流階層は 106 でほぼ横ばい、上流階層はやや増加傾向にあるが、それでも 127 である。これは当時増加しつつあった中流階層、つまり団地族の関心が自らの経済活動に集中し、子どもの行動に対する関心がゆるんだことを意味する。

この当時の親の養育態度が牛島（1963）によって報告されている。この調査は昭和 37 年（1962）におこなわれたので、今からみるとずいぶんと昔風な質問項目も多く、現代と直接比較ができるわけではない。しかしそれでも、当時の親たちの意識構造を推測する上で興味深い。例えば第 4 項の不良化防止の質問である。

当時の基準に従えば今の子どもはすべてが不良であろうし、不良という言葉自体が死語になっている点は別として、「あなたの家では、不良化防止ということを考える際、家庭でのしつけと学校でのしつけのどちらに重点をおきますか」という質問がおこなわれた。これに対し、学校を選んだ保護者は小学生で 16%、中学生で 18%、高校生で 17%であった。逆に家庭のしつけ強化を重視した保護者はそれぞれ、52%、46%、47%であり、家庭を重視するという回答が圧倒的に多かった。

しかし家事手伝いに関して、この頃からさせないという回答が多くなり始める。受験準備の場合でも手伝いをさせるべきだという意見に対し、そう思わない親が小学生で 34%、中学生で 38%、高校生では 46%になる。逆に、手伝いをさせるべきだという意見はそれぞれ 31%、29%、22%と減少していく。家事手伝いに関しては半数以上の親がこれを肯定的に評価しているにもかかわらず、受験の場合には手伝わなくてもよいと答えているのである。また、手伝いは子どもの教育上欠くことができない大切なものであるという意見は、それぞれの学年で 2 割程度の少数派に転落する。

子どもの考え方や欲求をよく理解できるかという設問に対し、理解できないことがあるという回答が小学生の親で 31.6%、中学生で 37.1%、高校生で 38.6%と、学年があがるにつれて増加傾向にあ

る。また、東京都の中学生の保護者では 29.8%が理解できないことがあると回答したのに対して、地方の保護者では 45.0%が理解できないことがあると回答した。親子の断絶は、この時点で地方に強調されている。

その後も日本の経済発展は続き、昭和 43 年（1968）には当時の西ドイツの GNP を追い抜き、世界第 2 の GNP を持つ。エコノミック・アニマルという言葉が自嘲的に登場したのはそれから 1 年後の昭和 44 年であるが、昭和 30 年代から 40 年代にかけての日本は、働けば働いただけ可処分所得が増加し、生活が楽になっていくことを実感できた時代であった。しかしながら両親が共働きをする結果、44 年には全国で小学生以下の子ども 483 万人が「鍵っ子」となった。それは農村でも同じ状況であった。父親の就労で家計を維持し、母親は専業主婦という「サザエさん型」家族は、この時期に大きな曲がり角にさしかかった。

時代は更に過ぎるが、今回の調査に関連したもう一つの先行研究に触れておく必要があるだろう。平成 3 年におこなわれた、「青少年の校外活動と家庭に関する国際比較調査」である。これは中学生と高校 1 年生を持つ日米の親に対しておこなわれた調査であるが、先の牛島の報告同様、今回の調査に関連する部分についてのみ、若干の整理をおこなっておく。

例えば家事手伝いの項目に、日米の親に大きな価値観の違いが見いだされる。この調査は細かな属性で整理されているがそれは無視して以下、性差の区分のみで数値を比較する。日本の母親は、家の用事や手伝いをやらせるという項目に、男児の場合 37.0%、女児の場合 53.9%で「ハイ」と答える。これがアメリカの母親では、男児 66.7%、女児 72.3%の比率となる。日本の母親は、アメリカの母親の半分程度しか男児に対する用事を言いつけていないし、女児に対しても 2/3 程度でしかない。確かにアメリカでは所得水準と子どもの家事手伝いの量に相関が認められるが（2 万ドル未満で 74.6%）、7 万ドル以上の所得階層であっても 66.7%が手伝いをさせており、明らかに日本の親は手伝いをさせていないのである。

無理をしてでも子どもの願いを叶えてやるという設問には、日本では 7.9%の男児の母親と、11.9%の女児の母親が「ハイ」と答えた。これに対しアメリカでは、男女児それぞれ 45.9%と 44.8%の母親が「ハイ」と答えている。日本の方が子どもに対して厳しいという印象を受ける。しかし、先の牛島の報告（1963）では 4 割近い保護者が、子どもの考えや欲求が理解できないと答えていることに注意を払っておかなければならない。さらに、親が生活一般において模範を示すという設問に対して、日本では 30.0%の男児と 34.9%の女児の母親が示していると答えている。これに対してアメリカでは、それぞれ 79.2%と 83.7%の母親が示していると答えており、親の自覚が強い。このような状況を考慮に入れると、日本の親が子どもの願いを叶えてやらないのは、厳しく接しているからではなく親子の価値観に断絶が見られるからであるという結論が導き出せる。そのことは次の設問でより明確になる。子どもの行動に一番強い影響を与えるのは誰かという質問である。

この質問に対し、日本では 20.6%の男児と 32.8%の女児の母親が、自分が一番強い影響を与えていると回答した。これに対してアメリカでは、49.6%の男児と 62.8%の女児の母親が、自分が一番強い影響を与えていると思っている。配偶者（夫）の影響力に関しては日本の場合、男児で 18.6%、女児で 6.9%、アメリカの場合はそれぞれ 25.7%と 10.4%の評価しかなく、この数値から見る限り、ア

アメリカでは昔の日本の農村にみるように、母親が主たるしつけや家庭教育の担当者であることを自覚している。逆に日本では家庭教育の当事者として、母親も父親もほとんどその役割を果たしていると思っていない。日本の子どもに一番強い影響を与えているのは学校の友達であり、37.3%の男児と43.7%の女児の母親が、友達の影響の方が強いことを認めているのである。この数値はアメリカでは、それぞれ12.9%と18.6%に低下する。

以上、本研究に関連する先行調査や回答傾向を作り出す社会情勢の分析をざっとおこなったが、ここから日本の家族や家庭が抱えている問題点がおぼろげに姿を見せる。それは子どもたちが、家事を含む労働一般から完全に切り離されたことが、労働を通じて様々な社会的スキルを獲得する道を閉ざしたことである。アメリカでは住宅の敷地面積や家屋構造などから、芝刈りやペンキ塗り、様々な木工作业など、子どもが参加できる家事労働がまだ少しは残されている。しかし、「ウサギ小屋」とまで揶揄された狭い日本の住宅において、また家事のほとんどが電化され、主婦さえ余暇時間をもてあましがちな現在、子どもの仕事は「勉強」だけになってしまった。要するに、頭でっかちで社会的スキルを脆弱化させた子どもたちが増加の一方をたどってきたのである。この傾向は昭和30年代後半に始まった。つまり今の30代以下の人々には、労働の経験や記憶はあまり残されていないのである。

そこで、とりあえず現代の青年たちがどのような親子関係の下で育ってきたのかについての基礎調査をおこない、そこに含まれる問題点を検討しておきたいと考えた。現代の子どもは無計画性は労働から切り離されたことと関係があると思うし、労働という行為が内包する、社会的スキル獲得のためのシステムについても将来的には考察される必要がある。今回の調査は、そのための第一歩である。

方 法

被験者： 吹田市にある、私立O学院大学男子学生162名、同大学の女子学生160名が参加した。学生たちは心理学概論Bと人間行動学、社会心理学の受講生の他、外国語学部と経営科学部、国際学部など他学部の同僚に依頼して、それぞれのクラスの女子学生に協力を求めた。既にこの調査に回答したことがある学生は、各担当者によってチェックがなされ、重複回答を回避した。質問紙は平成14年11月中にそれぞれの教室で配布され、無記名で回収された。男子学生の平均年齢は20.9歳、女子学生の平均年齢は20.1歳であった。

調査項目： こどものしつけは、モデリング対象としての自分を示すことから始まる。その後重要なことは、ほめる、あるいは叱ることによって、望ましい行動を強化あるいは消去していくことにある。従って本調査ではまず、子ども時代にどのような内容で父親および母親から叱られたのかを聞き出すための設問を用意した。同じ設問を、今度は父親および母親からほめられた経験として利用した。

チェック項目は、1)勉強、2)家事・手伝い、3)交友相手、4)趣味・興味、5)生活態度、6)行儀作法、7)言葉遣い、8)きょうだいげんか、9)記憶なしの9カテゴリーを用意し、複数回答を認めた。更にその強さと頻度について、印象を尋ねた。

設問の5から13では、感情面を含むしつけのあり方について質問した。回答の選択肢は3件法で

あった。設問 14 では、理想的な親子関係について質問した。選択肢は、1)会話の多い友達のような関係、2)進路を指し示す灯台のような関係、3)ライフスタイルが一緒の関係、4)仕事中心ではなく、家族と一緒にいる関係、5)独立した価値観で互いに尊重する関係の 5 項目を用意し、内 1 項目を強制選択させた。設問 15 では、父親と母親それぞれの、家族に対する貢献度を、1)家計、2)まとめ役、3)社会における活躍、4)社会への貢献、5)家事労働のそれぞれについて 100 点満点で何点の評価をつけるか、また総合点を 100 点満点で何点に評価するかと尋ねた。

設問 16 で、何歳まで親と一緒に部屋で就寝したかを尋ねた。年齢は 7 段階に区分し、最初の分離時期を 2 歳からに設定した。設問 17 では、親とのコミュニケーション量を、現在を含めて 7 年齢段階で質問した。それぞれの年齢において、非常に・普通・あまりないの 3 件法で回答を求めた。

設問 18 から 20 までは 困ったときに友達が親か、どちらに相談するかをケース別に尋ねた。また、設問 21 では、親と友達のいずれが大切か、22 では親が自分を愛してくれていると思うか、親子の心理的絆について質問した。これらいずれの項目においても 3 件法を採用した。

結 果

図 1 は、男子学生と女子学生が報告した、父親から叱られた経験のヒストグラムである。項目への

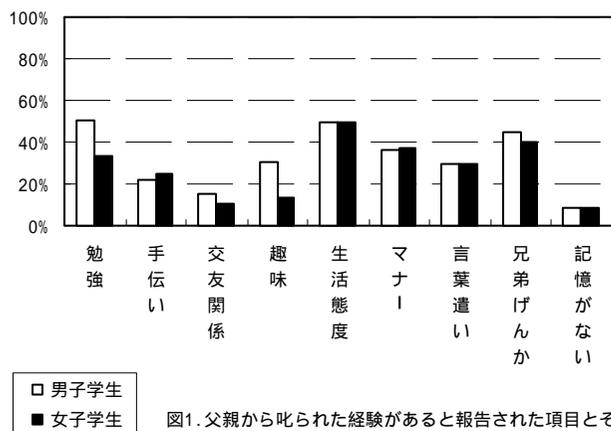


図1. 父親から叱られた経験があると報告された項目とその頻度

回答は複数回答が認められているので、男子学生が叱られた総度数は 451 となり、叱られた記憶がない 14 名を除外すると、1 人平均 3.04 項目に父親から叱責を受けたことになる。一方、女子学生の叱られた総度数 375 から記憶がない 14 名を除外すると、1 人平均 2.56 項目について、同じく父親から叱責を受けたことになる。両者を U 検定にかけたところ、 $p < .03$ で有意

な差が認められた。女子学生の方が父親から叱られていない。

男子学生は勉強に関連した内容で父親から叱られた経験者が一番多いが、経験をもつ者ともたない者の比率を Binomial テストで検定した結果、勉強関連では有意差が認められなかった。以下、比率の差の検定には全て Binomial テストに従うので、今後はカッコ内に有意水準のみを示す。手伝いに関して叱られた経験をもつ男子学生は、もたない者よりも少なく ($p < .001$)、交友相手に関して叱られていない者が多かった ($p < .001$)。趣味・興味で叱られた経験をもたない者が多く ($p < .001$)、マナーや好き嫌い ($p < .001$)、敬語や言葉遣いでも叱られていない者が多かった ($p < .001$)。生活態度に関連した内容ときょうだいに関連する内容では、叱られた者と叱られていない者の比率に差が認められなかった。父親から叱られた記憶がないと答えた学生は少なかった ($p < .001$)。

女子学生が父親からよく叱られたのは生活態度に関連した内容が一番多く、50%が叱られた経験があると報告した。叱られた者と叱られなかった者の比率の差を検定したところ、勉強に関連した内容に有意差が認められ、叱られていない者の方が多かった ($p<.001$)。以下、手伝いに関しては叱られていない女子学生が多く ($p<.001$)、交友相手に関しても叱られておらず ($p<.001$)、趣味・興味でも叱られていない ($p<.001$)。しかし生活態度では叱られた者と叱られていない者の間に差がなかった。マナーや好き嫌いでは叱られておらず ($p<.002$)、言葉遣いでも叱られていない者が多かった ($p<.001$)。きょうだい関係では叱られていない者が多かった ($p<.02$)。叱られた記憶がないと答えた女子学生は少なかった ($p<.001$)。

叱られた内容についての性差を見るために、ピアソンの二乗検定をおこなったところ、勉強に関連した内容において、男子学生の方が女子学生よりも父親から叱られていた ($\chi^2=11.28$, $df=1$, $p<.001$)。また、趣味や興味に関連する内容でも、男子学生の方が父親から多く叱られたと回答した ($\chi^2=13.04$, $df=1$, $p<.001$)。その他の項目には、男女間に有意差が認められなかった。

父親の年代を 50 歳以上と 50 歳以下に分け、それぞれの年代の父親たちがどのような内容で子どもを叱ってきたのかについてピアソンの二乗検定にかけたところ、家事・手伝いに関する内容で 50 歳以下の父親が子どもをよく叱っていた ($\chi^2=4.96$, $df=1$, $p<.03$)。その他の項目に関しては、50 歳以上と以下の間に差がなかった。

図 2 は、男子学生と女子学生が報告した母親に叱られた経験のヒストグラムである。用意された選

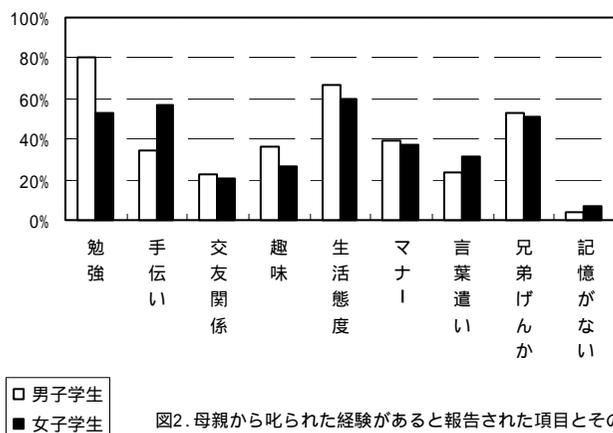


図2. 母親から叱られた経験があると報告された項目とその頻度

択肢は父親の場合と同じであり、また複数回答も認められているので、男子学生が母親から叱られた総度数は 577 となる。母親から叱られたことがないと答えた学生は 6 名いるので、これを回答者総数から除外すると、一人平均 3.7 項目について叱られた経験をもつ。女子学生は母親から叱られたことがない者が 11 名いるのでこれを除外し、総度数 538 を割ると、一人平均 3.6 項目について

母親から叱られていた。母親から叱られた比率について、男女間に差は認められなかった。

叱られた者と叱られていない者の比率の差を検定すると、男子学生は勉強に関連した内容で母親から叱られ ($p<.001$)、手伝いに関しては叱られた経験がない者が多かった ($p<.001$)。また、交友相手 ($p<.001$) や趣味・興味 ($p<.001$)、マナー ($p<.001$) と言葉遣い ($p<.001$) でも叱られていない者が多かった。生活態度に関しては叱られた者が多かった ($p<.001$)。母親から叱られた記憶がないと答えた者は少なかった ($p<.001$)。きょうだい関係では有意差は認められなかった。

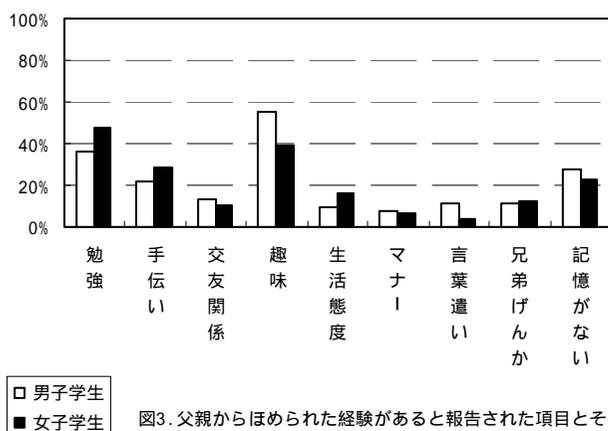
叱られた者と叱られていない者の比率の差を検定した結果、女子学生は母親から生活態度に関連した内容で叱られているが ($p<.02$)、交友相手 ($p<.001$) や趣味 ($p<.001$)、あるいはマナー ($p<.001$)

や言葉遣い ($p<.001$) に関連した内容では、叱られていない者が多かった。勉強に関連した内容と、家事や手伝い、きょうだい関係に関連した内容では、叱られた経験をもつ者ともない者の間に有意差は認められなかった。また、叱られた記憶がないと答えた学生は少なかった ($p<.001$)。

母親から叱られた内容について、ピアソンの二乗検定で性差を検定したところ、男子学生が女子学生よりも勉強関連で叱られていた ($\chi^2=31.15, df=1, p<.001$)。逆に、手伝いに関しては女子学生よりも叱られることが少なかった ($\chi^2=17.11, df=1, p<.001$)。生活態度関連などその他の項目に関しては、男女間に有意差は認められなかった。

父親の年代を 50 歳以上と 50 歳以下に分け、それぞれの年代の男性を夫にもつ母親たちが、どのような内容で子どもたちを叱ってきたのかについてピアソンの二乗検定にかけたところ、きょうだい関係に関連する内容について、50 歳以下の男性を夫にもつ母親の方が子どもをよく叱っていた ($\chi^2=4.75, df=1, p<.03$)。その他の項目に関しては有意差は認められなかった。

叱られたのと同じ項目について、逆にほめられた経験も聞き出した。図 3 は、男子学生と女子学生



が報告した父親からほめられた経験のヒストグラムである。男子学生が父親からほめられた総度数は270で、ほめられた記憶がない学生が45名おり、これを総人数から除外すると、1人平均2.31項目についてほめられている。男子学生で叱られた記憶がないと回答したのは14名であったが、逆にほめられた記憶がないと回答した者は45名なので、3倍以上の学生が父親からほめられた

ことがないと感じている。

女子学生が父親からほめられた総度数は257で、ほめられた記憶がないと回答した35名の学生を除外して計算すると、1人平均2.12項目についてほめられている。女子学生も男子学生同様、ほめられたことがないと回答した者が叱られたことがない者に比較して、3倍弱に上った。父親からほめられた度数に関して、男女間に有意差は認められなかった。

ほめられた者とほめられなかった者の比率の差を検定した結果、男子学生では勉強に関連した内容で父親からほめられていない者が多く ($p<.001$)、以下、家事・手伝い関連、交友相手、生活態度、マナー、言葉遣い、きょうだい関連でもほめられていない者が多かった (全て、 $p<.001$)。趣味・興味に関しては有意差がなかった。ほめられた記憶がない学生は少なかった ($p<.001$)。

女子学生が父親からほめられた経験の比率の差を検定したが、ほめられた者が有意に多い項目は見あたらなかった。家事・手伝い、交友関係、生活態度、マナー、言葉遣い、きょうだい関係、趣味・興味の各項目で、ほめられた経験のない者の方が多かった (全て、 $p<.001$)。勉強に関連する内容では、ほめられた者とほめられなかった者の比率に有意差がなかった。ほめられた経験がない女子学生

は少なかった ($p<.001$)。

ほめられた内容について、ピアソンの二乗検定で性差を検定したところ、女子学生は父親から勉強でほめられていた ($\chi^2=4.92, df=1, p<.03$)。一方男子学生は、趣味や興味に関連した内容で父親からほめられていた ($\chi^2=7.32, df=1, p<.01$)。言葉遣いに関連してほめられた経験は男女とも非常に少ないが、父親からほめられたと答えた者は男子学生に多かった ($\chi^2=6.82, df=1, p<.01$)。その他の項目には差がなかった。

父親の年代を 50 歳以上と 50 歳以下に分け、それぞれの年代の父親たちがどのような内容で子どもたちをほめているのかについてピアソンの二乗検定にかけたところ、50 歳以下の父親の方が 50 歳以上の父親よりも、勉強に関連した内容で子どもをよくほめていた ($\chi^2=6.33, df=1, p<.01$)。また、ほめられた記憶がないと回答したのは、50 歳以上の父親をもつ学生の方が、50 歳以下の父親をもつ学生よりも多かった ($\chi^2=4.76, df=1, p<.03$)。

図 4 は、男子学生と女子学生が報告した、母親からほめられた経験のヒストグラムである。男子学生

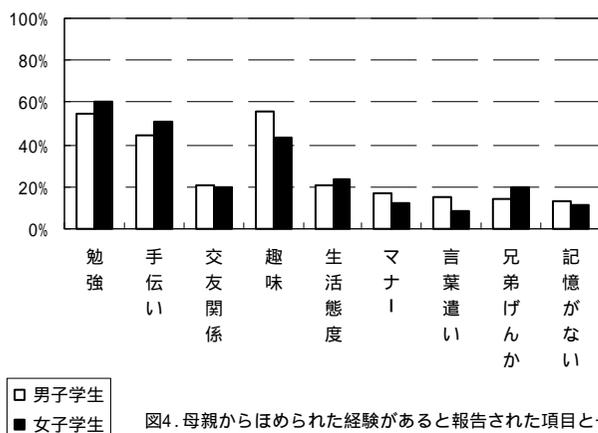


図4. 母親からほめられた経験があると報告された項目とその頻度

生が母親からほめられた総度数は 392 で、ほめられた記憶がない学生が 21 名おり、これを総人数から除外すると、1 人平均 2.78 項目についてほめられている。男子学生で母親から叱られた記憶がないと回答したのは 6 名であったが、逆にほめられた記憶がないと回答した者は 21 名であった。女子学生が母親からほめられたのは 368 総度数である。ほめられた記憶がない学生が

18 名いるので、これを除外して計算すると、1 人平均 2.59 項目についてほめられている。母親からほめられた度数に関して、男女間に有意差は認められなかった。

ほめられた者とほめられなかった者の比率の差を検定した結果、男子学生では母親からほめられた記憶をもたない者が多く、交友関係、生活態度、マナーや好き嫌い、言葉遣い、きょうだい関係のそれぞれの項目において、ほめられた記憶をもつ者がもたない者よりも少なかった (順に、 $p<.001$)。勉強に関連した内容と手伝いに関連した内容、それに趣味や興味に関連した内容には、有意差は認められなかった。母親からほめられたことがないと回答した学生は少なかった ($p<.001$)。

ほめられた者とほめられなかった者の比率の差を検定した結果、女子学生は勉強に関連した内容で母親からほめられたと回答した者が多かった ($p<.001$)。家事や手伝いに関連した内容と、趣味や興味に関連した内容には有意差が認められなかった。その他の項目、つまり交友関係、生活態度、マナーや好き嫌い、言葉遣い、きょうだい関係の全ての項目において、ほめられた経験をもつ者がもたない者よりも少なかった ($p<.001$)。また、ほめられた記憶がないと答えた女子学生は少なかった ($p<.001$)。

母親からほめられた内容について、ピアソンの 二乗検定で性差を検定したところ、趣味や興味に関する内容でほめられたと回答した男子学生が女子学生よりも多かった ($\chi^2=5.32$, $df=1$, $p<.02$)。また、言葉遣いで母親からほめられたと回答した男子学生が多かった ($\chi^2=4.09$, $df=1$, $p<.04$)。その他の項目に関しては、有意差は認められなかった。

父親の年代を 50 歳以上と 50 歳以下にわけ、それぞれの年代の男性を夫にもつ母親たちが、どのような内容で子どもたちをほめてきたのかについてピアソンの 二乗検定にかけたところ、勉強に関する内容について、50 歳以下の男性を夫にもつ母親の方が子どもをよくほめていた ($\chi^2=4.74$, $df=1$, $p<.03$)。また、食事のマナーや好き嫌いに関しても、50 歳以下の男性を夫にもつ女性がよくほめていた ($\chi^2=4.06$, $df=1$, $p<.05$)。母親からほめられた記憶がないと答えた学生は、50 歳以上の男性を夫にもつ母親が多かった ($\chi^2=9.40$, $df=1$, $p<.002$)。

父親から叱られた記憶がないと回答した男子学生と、同じくほめられた記憶がないと回答した男子学生の分布を、ピアソンの 二乗検定で検討した。その結果、ほめられた記憶がないと答えた学生の比率が叱られたことがないと答えた学生よりも多かった ($\chi^2=19.71$, $df=1$, $p<.001$)。女子学生の回答には有意差は認められなかった。母親に叱られた記憶がないと回答した男子学生と、同じくほめられたことがないと回答した男子学生の分布を、ピアソンの 二乗検定で検討した。その結果、ほめられた記憶がないと回答した者が有意に多かった ($\chi^2=15.93$, $df=1$, $p<.001$)。女子学生の回答には有意差は認められなかった。

設問 5 から 13 は、しつけのあり方についての質問である。性差に関する有意差は、5 から 13 の全ての設問において認められなかった。

設問 5 は、あれこれ命令をされたと感じていたか否かに対する質問で、回答は“いつも”、“たまに”、“記憶なし”の 3 段階で求めたが、“いつも”と“たまに”命令された群を一緒にまとめ、命令された記憶がない群と比較した。ピアソンの 二乗検定の結果、男子学生の方が女子学生よりも、父親から命令されたと感じていた ($\chi^2=4.56$, $df=1$, $p<.03$)。また男子学生は、母親からも命令されたと感じていた ($\chi^2=4.80$, $df=1$, $p<.03$)。比率の差の検定では、男女共、命令された経験をもつ者がもたない者に比較して多かった ($p<.001$)。

設問 6 は、食事や行儀作法、人前で舞の振りについてしつけを受けたか否かに関する質問であるが、男女学生共に、受けたことがないと回答した者が有意に多かった ($p<.001$)。設問 7 では、しつけに伴う体罰を尋ねたが、男子学生では父親および母親からの叱責に、体罰が伴ったと報告した者と報告しなかった者の間に有意差は認められなかった。一方、女子学生では父親から体罰を受けたと答えた者は有意に少なかった ($p<.001$)。しかし、母親から受けた体罰の記憶には有意差が認められなかった。

設問 8 は、注意や叱責を受けたときの親の感情の強さに関する設問であったが、父親が感情をむき出しにして叱ったと回答した男子学生が 35%、女子学生が 28%いた。しかしながら感情は抑制されていたと回答した者もそれぞれ 26%と 23%があり、群間に有意差は認められなかった。同様に、母親の叱責には感情が抑制されていたと回答した者が男子で 16%、女子で 13%であったが、有意差は認められなかった。なお、父親への回答の欠損値は男子学生に 3、女子学生に 1、母親への回答の欠

損値は男子学生に1であった。

設問9は、親の前での言動に関する注意に関する質問であったが、比率の差を検定した結果、男子学生は父親の前では気をつけたと回答した者が、気をつけなかった者よりも有意に多かった($p<.03$)。母親に対しては有意差が認められなかった。女子学生では父親の前でも母親の前でも、気をつけなかった者と気をつけた者の間に有意差は認められなかった。欠損値は男女それぞれ5と3であった。

設問10は、人前での感情の表し方であったが、注意を受けた者と受けなかった者の比率に有意差は認められなかった。比率の差を検定した結果、注意を受けたことを覚えていない学生が多かった($p<.001$)。女子学生も同様に、父親から注意を受けたかどうか覚えていないという回答が多かった($p<.001$)。母親からの注意に関しては、覚えていない者との間に有意差は認められなかった。欠損値は男女それぞれ5であった。

設問11から14はしつけではなく、親子関係一般に関する質問であった。設問11では、自分が親になったとき、親と同じようなしつけをするか否かについて質問をした。その結果、父親と同じようなしつけをしたいと考えている男子学生が16%、母親と同じようなしつけをしたいと考えている男子学生が13%で、やや思うが64%と70%、全く思わないが21%と17%であった。欠損値が男子学生に2、女子学生に1あった。女子学生では父親に対する同意が18%、母親に対する同意が21%、部分的同意がそれぞれ57%と66%、全くそうは思わないという回答がそれぞれ25%と14%あった。

設問12で、父親を愛しているし尊敬できると答えた男子学生は62%、どちらでもないが33%、愛していないが6%であった。同じく、母親を愛しているし尊敬できると答えた男子学生は72%、どちらでもないが28%、愛していないが2%であった。女子学生で父親を愛しているし尊敬できると答えた者は55%、どちらでもないが39%、愛していないが6%で、欠損値が1あった。母親を愛していると答えた女子学生は71%、どちらでもないが29%、愛していないが2%であった。

設問13の、子ども時代の父子関係をポジティブ・イメージで回想できる男子学生は37%、どちらでもないが53%、ネガティブが10%、欠損値が1であった。女子学生ではポジティブが43%、どちらでもないが49%、ネガティブが8%であった。母親との子ども時代をポジティブに回想できる男子学生は42%、どちらでもないが53%、ネガティブが5%、欠損値が1であった。同じく女子学生の母親に対する回想でポジティブなのは49%、どちらでもないが44%、ネガティブが7%見いだされた。

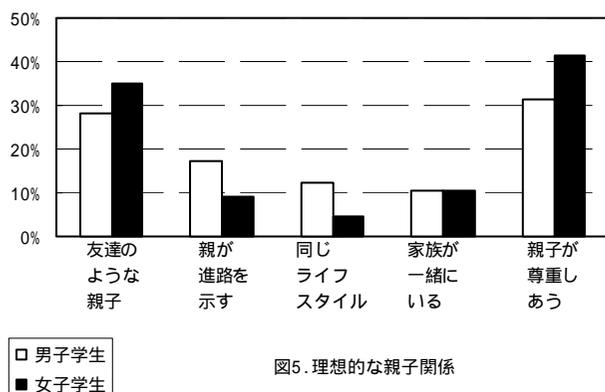


図5.理想的な親子関係

た。欠損値はなかった。

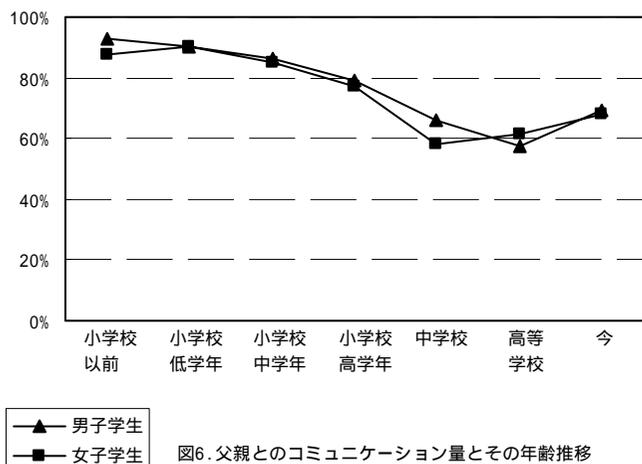
設問14では、理想的な親子関係に関する質問をおこなった。選択肢は5つからなり、内一つだけを選択する強制選択である。その結果、31%の男子学生が、「それぞれ独立した価値観をもち、互いを尊重し合う関係」を選んだ。2番目には「友達のように対等で常に会話がある

関係」(28%)が選ばれ、3番目には「灯台のように子どもに進路を指し示す存在」(18%)、以下、「趣味や興味など、ライフ・スタイルが一緒の関係」(13%)、「仕事より家族を重視する関係」(11%)の順となった。女子学生では41%が、「独立した価値観をもち、互いを尊重し合う関係」を選んだ。2番目は「友達のように対等で常に会話がある関係」(35%)が選ばれ、3番目には「仕事より家族を重視する関係」(10%)、以下、「灯台のように子どもに進路を指し示す存在」(9%)、「趣味や興味など、ライフ・スタイルが一緒の関係」(5%)の順となった。男女学生の回答を、パーセント表示で図5に示す。

設問15で、親に対する評価を100点満点で質問したが、各カテゴリーに対する評価と総合点評価に関して、誤解した回答が見られたために、この設問は採点から除外した。

設問16は、何歳まで親(片親を含む)と一緒に部屋で就寝したかという質問である。男女学生の子ども時代の記憶をたどった結果、男子学生では6歳頃までというのが一番多く(34%)、次に8~9歳(17%)、4歳頃(16%)、10~11歳頃(12%)、12~13歳頃(9%)、2歳頃(6%)、中学生まで(5%)という順になった。同様の傾向は女子学生にも見られ、6歳頃まで(31%)、8~9歳(19%)、4歳頃(13%)、10~11歳頃(11%)、12~13歳頃(11%)、2歳頃(7%)、中学生まで(7%)という順になった。

設問17で、子ども時代に両親とどのようなコミュニケーションがあったかを尋ねた。小学校入学



以前、低学年、中学年、高学年、中学校、高等学校、そして現在のそれぞれの時代における父親とのコミュニケーション量を、それぞれの回想に基づいてヒストグラムにしたものを図6に示す。離婚で片親家庭であったり、死別して回答できないと答えた学生は、男女それぞれ回答者総数から除外した。図には非常にあったと回答した者と普通にあった者を一緒にして表示した。

その結果、小学校入学以前に父親と普通程度以上コミュニケーションがあったと答えた学生は、男子で92.5%、女子で87.3%に上った。男子学生はこの時点を経験を最高として、以後それぞれの年代でコミュニケーション量は下降する。父親とのコミュニケーションが最も少なくなるのが高校時代で、普通以上であったと回答した男子学生は57.5%であった。一方、女子学生は父親とのコミュニケーション量を男子学生よりも幾分少なく評価し、小学校低学年で89.9%と最高を示すが、中学生の時には58.2%と最低になり、その後回復して現在は67.7%が普通以上と評価した。男子学生の現在は69.4%と、女子学生とほぼ同じくらい父親とコミュニケーションがあると回答した。

母親とのコミュニケーション量は、男子学生の小学校入学以前が最も多く、99.4%であった。以後、年齢が上がるにつれて順に低下し、最も少なかったと評価されたのが高校時代で81.4%であった。現

在はやや回復傾向にあり、86.3%が普通以上のコミュニケーション関係にあった。一方女子学生は、入学前と低学年が95.6%で同率であり、以後、順に減少して中学時代に87.5%と最低になるが、この数値は現在の88.8%とほとんど変わっていない。

設問18は、金銭的に困ったとき親に相談するか、あるいは親ではなく友達に相談を持ちかけるかという質問であった。“相談するかも知れない”と“相談する”をまとめて“しない”群と比較した結果、男女学生とも、金銭的に困ったときは父親あるいは母親に相談を持ちかけると回答した（いずれも、 $p<.001$ ）。また、Uテストで性差を検討したところ、女子学生の方が男子学生に比較して、友達よりも母親に相談を持ちかけると回答した（ $U=-2.02$, $p<.05$ ）。

設問19は、人間関係などのトラブルに巻き込まれたとき、親に相談するかそれとも友達かという設問であったが、男子学生は友達ではなく、父親もしくは母親に相談を持ちかけると回答した（それぞれ、 $p<.01$, $p<.001$ ）。女子学生は友達よりも母親に相談を持ちかけるが（ $p<.001$ ）、父親と友達に相談する比率には差が認められなかった。また、男女の性差を検討したところ、男子学生は父親に相談を持ちかけることが、女子学生よりも有意に多かった（ $U=-2.0$, $p<.05$ ）。

設問20は、何か悩み事があると、親に相談するか友達かという設問であるが、友達か親かという相談傾向に性差は認められなかった。男子学生も女子学生も、どちらかといえば父親を敬遠しており、友達と父親の比率間に有意差は認められなかった。しかし両者とも、悩み事相談相手としては友達よりも母親を選択した（それぞれ、 $p<.001$ ）。

設問21では、親と友達、いずれを大切と考えるかを尋ねたが、選択した比率に有意差は認められなかった。男子学生で父親を友達よりも大切に思うと回答したのは66人で、友達の方が大切であると回答したのは16人であったが、どちらとも言えないに最大の選択が集まっており、78人がこれを選択した。欠損値は2であった。女子学生でも同様の傾向が認められており、父親が大切が70人、友達の方が大切が10人、どちらとも言えないが78人であった。母親に対する回答傾向も、ほぼ同様であった。

最後の設問22で、親は自分のことを愛してくれていると思うか、そうは思えないかを質問した。父親が大変自分のことを愛してくれていると思うのは、男子学生で120人、女子学生で132人、あまり思わないという回答が男子学生で38人、女子学生で20人、全くそう思わないという回答が男子学生で2人、女子学生で6人いた。欠損値はそれぞれ2であった。母親が自分を大変愛していると思うのは、男子学生で138人、女子学生で142人、あまり思わないのが男子学生で23人、女子学生で14人、全く思わない男子学生は1人、女子学生は3人いた。女子学生には欠損値が1あった。

考 察

今回の調査対象者は吹田市のO学院大学の学生に限定した。O学院大学は8学部をもつ文化系総合大学ではあるが、偏差値的に見るならば42~44程度の位置にあり（代ゼミ調べ、2002年）、勉学に強く動機づけられた学生たちが多くとはいえない。しかし逆に、エリート養成を目的とした大学ではないので、ある意味、日本の平均的な若者像を求めるためには最適の母集団であるともいえる。母

集団が限定されていることで、当然、ここに報告した親子関係が現代日本の若者全体の親子関係を代表するものではないが、ごく一般的な、現代日本の家族関係が具体化されている可能性も高い。そこで以下、まず学生たちがその子ども時代に親から叱られてきた内容から検討してみよう。

叱られた内容:結果に示したように、男子学生は女子学生よりも父親から多く叱られていた。しかしながら男女共、母親からより頻繁に叱られており、日本の家庭では父親よりも母親が子どもに多くの注意を与えていることが改めて確認された。もちろんこれは、母親が子どもに対するしつけ教育を担当していることを意味するものではない。しかし数値に見る限り、母親の方が父親よりも日常的に子どもに関わっていることは明確である。ただ、その関わりはやはり勉強が中心であった。

例えば、父親から勉強で叱られたと回答した男子学生は51%であるが、同じ内容で母親から叱られたと回答した男子学生は81%に達した。男児に対して勉強しなさいと注意を与える母親は、父親に比較して3割も多いのである。また、父親から勉強しろと注意を受けた女子学生は32%で、男児に比較して2割ほど少ない。一方、子ども時代に勉強に関連して母親から注意を受けた女子学生は51%で、女児に対する注意は男児に対するよりも3割少ない。この2つの数値を突きあわせるとき、母親の期待は女児よりも男児に強いことが示唆される。また父親も母親も、女児に対しては勉強しろという注意を強く与えていないこともわかる。

男女という子どもの性の違いで、親が勉強に関連して与える注意の度合いが異なる原因は2つ考えられる。一般的に女児は社会化の進展が早く、また、反社会的性格は男性の1/10程度であることからわかるように(荘巖, 2000), 社会の様々なシステムに対して自分を積極的に適応させていく傾向が強い。そのため女児は、勉強をせずに叱られて親との間に不要な摩擦をつくり出すよりも、勉強をする(あるいはしているふりをする)方が得であるということの自覚が早い。女子学生は勉強に関連して両親から叱られた経験が少ないが、これがその理由である可能性が高い。

2番目の理由は、男児は「家」の跡継ぎという伝統的な意識から、未だに我々が脱し切れていないことにある。ル・ヴァイン(LeVine, 1977)が指摘するように、子どもの経済的自立は全ての文化において親の3大養育目的の1つである。現代日本のような高度工業化社会では、それは高等教育機関へ進むことによって保証される。つまり、偏差値の高い大学に進学して優良企業や成長企業に職を得ることが、より良い経済的自立につながる。母親が男児に対して勉強しろと叱るのは、この理由による。

男児が女児よりも勉強に動機づけられることが強く望まれているのは、しかしながら特に最近の傾向というわけでもない。例えば、NHK放送世論調査所が昭和48年(1973)におこなった「現代日本人の意識構造」調査でも指摘されているが、教育こそ親が子に対して準備できる唯一の資源であるという考え方は根強い。5年毎のおこなわれる定期調査においても一貫して変わっていないのである。教育こそが、特に我が家が男児に対して準備できる唯一の資源であるという意識は、従って昭和期はもちろん、封建制が崩壊した明治期にまで遡れるし、それは工業化社会の宿命とも言えるものである。

男子学生が父親から叱られた第2位は生活態度に関連した内容であり、半数がこれに関連して叱られた経験をもつ。同様に、生活態度に関して母親から叱られた経験をもつ男子学生は67%に達する。女子学生も男子学生と同様であり、その半数が父親から生活態度に関連して叱られた経験をもつ。彼

女たちは母親からも生活態度に関連して一番多く叱られており、60%が経験をもつと報告している。女子学生は勉強では母親から叱られることが少ないが、最も多くの母親たちから生活習慣関連で叱られている。O 学院大学の学生は、子ども時代の生活習慣が不規則であったり、整理整頓などの身辺整理が十分におこなえない傾向が強かったのかも知れない。

当然のことであるが、しつけの目的は社会生活を送るために必要な生活習慣をしっかり身につけることにある。親たちの努力が実り、きちんとした生活習慣が今現在の学生たちに形成されているか否かは別として、学生たちがこれだけ叱られてきたということは、現代でも親が家庭教育をおこなっている証拠であるとも言える。しかし、しつけは親が模範を示して初めて効果をもつのであった、注意のしっばなしでは何ら効果は上がらない。同時にまた、子どもたちの生活態度がだらしのないのは親自身の生活習慣が不規則であったり都合主義であったり、要するに一貫性がなかったことの証明でもある。従ってこの問題は、個別、O 学院大学学生だけの問題ではなく、現代日本社会の価値観や道徳・倫理観、人間観などの不連続性の問題として、改めて検討しなおす必要があるだろう。

きょうだい間のけんかに関しては、それぞれ父親からも母親からも、一定程度の割合で叱られている。しかし、きょうだいげんかで叱られたこととしつけ教育は別問題である。むしろ子どもたちは、同胞や友だちとのけんかを通じて、社会的約束事の重要性や人間関係の機微を学習していくのであり、けんかは子どもの社会化過程に必要なものである。親はきょうだいげんかに関連して子どもに注意を与えているが、けんかを通じて子どもは人間関係の基礎を学習するということを忘れてはならない。

学生たちが親からあまり叱られなかった項目のトップは交友関係である。これに関連して父親から叱られた経験をもつ男子学生は 15%、女子学生は 11%に過ぎない。母親は若干多くの注意を与えているようであるが、2 割程度の学生が注意された記憶を残しているにすぎない。ここに示された数値を解釈するとき、平成 3 年におこなわれた、子どもに一番強い影響を与える存在は誰かという日米比較調査を参照する必要があるだろう。

問題でも述べたように、この調査で報告された日本の母親の 4 割が、子どもの行動に一番強い影響を与えるのは自分ではなく、友達であると答えている。実際、平成 11 年度の青少年白書では、日本の子どもの悩み事や心配事の相談相手は友達であり、52.4%の子どもがまず友達に相談を持ちかけると回答している。昔からそうであった可能性も高いが、友だちの影響が非常に強いのが現代の日本文化、あるいは日本の子ども社会の特徴なのである。先に引用したように平成 3 年の国際比較調査を見る限り、親はこの事実気づいている。しかし、今回の調査で日本の親は、子どもの友達関係や遊びの内容についてほとんど関心を払っていないことが明らかになった。

このような親の態度が、いじめや非行のサインを見落としたりしている可能性もあるが、親が子どもの仲間関係に関心を払わない最大の理由が、実は子どもに帰属する聖域の拡大化にある。

戦前の子どもにとって、親が踏み込むことの出来ない聖域は全くなかった。しかし戦後、総理府が昭和 49 年（1974）に 1 世帯 1 住宅は一応達成されたと宣言し、1 住宅あたり延べ面積が昭和 38 年（1963）の 58.97m²から昭和 58 年（1983）には 81.56m²に増加した。また、生涯特殊出生率は昭和 50 年（1975）に 2.0 を切って 1.91 に低下し、以後ほぼ一貫して低下を続けているが、このころから子どもたちには個室を与えることが可能になった（数値は、平成 13 年版国民生活白書調べ）。聖域

の登場である。

交友関係や子どもの個室における行動に注意を払うことは、親にとってもストレスである。従って、ストレスを発生させる可能性がある部分は、子どもの自主性に任せたと聖域化し、子どもの方も親がその部分に触れてくると、それこそ「勝手だべ」(佐藤, 1951)と自己の権利を主張する。こうしていつの間にか、表面から見れば何の問題も見あたらないが、互いが深く関わらないという「家族ごっこ」が成立する。

これに関連して、もう一つ触れておくことがある。NHK 放送文化研究所が5年おきに繰り返している定点観察研究、「現代日本人の意識構造」にまとめられている父親像との比較である。調査は16歳以上70歳代まで、いわばすべての年齢層を対象にしておこなわれているが、その第5版に描かれる理想の父親像で注目しておく必要があるのは、子どもを信頼して干渉しない父親像が理想という回答が、子どもからではなく大人サイドの理想像として、調査の度に年々増加し続けていることである。この項目に対する同意は、1973年の第1回目調査において15%であったものが、5回目の1993年に22%になり、6回目の1998年でも同じく22%を得ている。

干渉しない父親像というのは、今回調査の「独立した価値観をもち、互いに尊重しあう関係」に該当する。今回の調査では、男子学生の内31%が、また女子学生の内41%がこれを理想像として選択した。表現に用いた言葉とその文言はまさに理想的であるが、これを選択した学生たちは文言とは裏腹に、自分のことにはかまわないで欲しいと言っているのである。先のNHK調査では国民全体として見た場合、忠告を与える存在が最大で41%、次が仲間のような存在で29%、不干渉が22%、模範が6%、その他2%となっているが、学生たちは親に忠告を与えて欲しいとは思っていないし、親が自分に模範を示せるとも思っていない。戦後に始まった世代間断絶は、ある意味、現在がそのピークにあるのかもしれない。

敬語や言葉遣い、あるいは食事や人前でのマナーなどに関しても、学生たちは親から叱られていなかった。しつけが形から入ったことと関連しているのかも知れないが、昔の親は起居振る舞い、ハシの上げ下げ、お茶碗の持ち方に至るまで細かな指示を子どもに与えた。あるいは言葉遣いや挨拶習慣も厳しく指導した。親の言いつけに対しては、中流以下の家庭にあっても「ハイ」と返事することが求められたし、冒頭に紹介したように、日常の挨拶習慣はきちんと守られた。しかし最近では、例えば設問14で質問したように親子は友達感覚で、親に対して敬語を使う子どもはいないし、一昔まで当たり前と考えられていた生活習慣の多くが顧みられなくなった。現代家族は、行儀作法に関するしつけはおこなわなくなったのである。

叱る行動は、親の年齢によって異なる可能性があるため、父親の年齢を基準に、50歳以上と以下の2群に分けて検討した。その結果、50歳以下の父親の方が、家事や手伝いに関して子どもをよく叱っていた。また有意差には結びつかなかったが、51%の学生が今現在50歳以下の父親に勉強関連で叱られた記憶があると報告しているのに対して、50歳以上の父親から勉強関連で叱られた記憶をもつ者は45%であった。生活態度に関連した内容では60%の者が50歳以下の父親に叱られた記憶をもつが、50歳以上では54%に減少する。また、77%の者が、50歳以上の男性を配偶者にもつ母親から勉強に関連して叱られたのに対して、50歳以下ではこれが69%に減少する。

生活態度関連では、50歳以上の男性を配偶者とする母親の70%が子どもを叱っているが、50歳以下の男性を配偶者とする母親に叱られた者は60%に減少する。50歳以上の配偶者をもつ母は生活態度で、50歳以下の配偶者をもつ母は勉強で、それぞれ子どもをよく叱っていたのである。生活態度と勉強のいずれを重視するかは、夫の年齢に依存している可能性がある。

ところで今回は、母親の年齢を基準にした比較はおこなわなかったが、団塊の世代とそれ以後の世代では、社会経済的情勢を含めて、意識構造に非常に大きな相違があることがその理由である。今回は団塊の世代をやや広く解釈して27年生まれまでを一つのコホートとした。それはあと515人が生まれていたら、この年も200万人の新生児が誕生しており、翌28年より15万人ほど多いことから、この年までを団塊の世代とすることが妥当であると考えからである。また、この年代までは専業主婦が多く、「サザエさん」型家族であるところから、父親の年齢に基準を合わせる方が、コホート間の違いが明確になると考えたからである。もちろん、今後、このねらいが正しかったかどうか、改めて検討は重ねる。

ほめられた内容:これは当然、比率の差の問題であって絶対的な事実を示すものではないが、結果に示したように、女子学生は父親から勉強に関連したことでほめられている。一方、男子学生は趣味や興味に関連した事柄、また言葉遣いで、女子学生に比較して父親からほめられた経験をもつ。しかし、個々の項目に対して Binomial テストで比率の差の検定をおこなったが、ほめられた経験をもつ者ともたない者の間に有意差が認められない項目はあっても、ほめられた者が有意に多い項目は見あたらない。これは男女学生に共通しており、少なくとも O 学院大学に在籍する学生は、子ども時代に親からあまりほめられていないことがわかる。これが今回対象とした O 学院大学の学生に限定される現象なのか、あるいは他大学の学生にも共通する現象なのかは、今後の調査に待つ必要がある。

敬語や言葉遣い、あるいは食事のマナーや食べ物の好き嫌いといった、ごく日常的な内容でほめられた経験をもつ者は男女とも非常に少なく、これらの事柄に関するしつけの必要性は親の意識にない。実際に、昭和54年(1979)の青少年白書では、総理府青少年対策本部の「非行原因に関する総合的調査」の資料が引用されているが、そこで調査された親のしつけ項目の中には今回の調査に利用したマナーなどの項目が、確かにマナーと少年非行は直接の関係がないにしても、既に除外されている。しかし少ないとはいえ、両親は食事のマナーや言葉遣いに関して注意を与えている。母親からほめられた男子学生は15%程いるし、父親からほめられた経験をもつ女子学生は12%、母親からは9%がほめられていた。現在でも1割から2割程度の家庭では、このような伝統的なしつけが守られていることを示唆するデータである。

父親と母親、どちらが子どもをよくほめているのであろうか。総度数から推測すると、父親からほめられたと回答した総数が527、母親からほめられた総数が760であるから、母親は約1.5倍、父親よりも子どもをほめている。叱るのも母親が多いが、相対的に見て総度数が少ないとはいえ、ほめる行為にもやはり母親の方が深く関わっている。そのことは設問17の、コミュニケーションのあり方に見て取れる。後に検討するが、子どもとのコミュニケーションは断然、母親に多いのである。

面白いことに、ほめるあるいは叱るという行為には、親の年齢が反映されていた。50歳以上の男性およびその年齢の男性を配偶者にもつ女性は、子どもの行動をあまりほめず、むしろ叱っているが、

逆に50歳以下の群は子どもをほめているのである。このことは、親子の関わり方が時代によって変化していることを意味する。そう考えるとき、現在50歳以上、つまり昭和27年（1952）以前の生まれとそれ以後の生まれの、時代背景を考えておかななくてはならない。

戦後は時間通り、昭和20年（1945）8月16日から始まったわけではない。日本国憲法が施行されたのは昭和22年5月であるし、「経済実相報告書」という名で最初の経済白書が出版されたのも昭和22年であった。またこの年には最初のベビー・ブームが到来し、267万人弱が生まれてきた。昭和24年には出生数が2,696,638人とピークに達するがすぐに減少し始め、現在49歳の人、つまり昭和28年（1953）生まれは1,862,348人で、最大のピークであった24年と比較すると約83万5千人少ない。昭和22年から27年までが一つのピークなのである。そういうわけで、27年生まれまでを広義の「団塊の世代」に分類するならば、27年までが戦後第一世代、28年以後が戦後第二世代という時代区分が可能である。

教育制度から見ても、真の戦後の始まりは昭和22年であった。6・3制と男女共学はこの年の4月から施行されたし、10月には帝国大学の名称が廃止され、国立大学となった。一方、それから6年たった昭和28年は、先に述べたようにテレビの本放送が開始された年でもあり、戦後は足音を立てて遠のき始めた。経済面から見ても昭和27年は朝鮮戦争特需の「消費景気」で潤い、28年は国民生活白書に景気一巡過程と位置づけられているが、都市の復興がようやく農村に追いついた頃でもある。人々の生活は、ようやく一息ついたという表現が可能になった時代に入ってきたのである。

このような社会経済状況の推移から見れば、昭和28年以後に生まれた現在の50歳以下の男性、あるいはその配偶者である妻たちは、それ以前の世代に比べて、戦後の貧しさを記憶に残さなくなった最初の世代であるといえよう。彼らが学齢期に達したときは（昭和35年、1960）テレビがカラー放送を始めた年でもあり、大宅壮一が「レジャー」という新語を造ってレジャー・ブームが巻き起こったように、更には60年安保が終息したように、確かに一つの時代の変わり目だったのである。

こうして昭和28年以後の生まれは、経済成長のまっただ中で多感な少年時代を送った。しかしそれはまた、偏差値で進路が決定されたり、受験戦争と称される学歴社会の到来でもあった。このような時代に思春期や青年期を送ったことが、勉強に関連して子どもを叱り、同様に勉強に関連して子どもをほめる原因となっていることが推測される。またこの世代からは「友だち親子」という関係が見られ始めるが、少子化で親子の年齢差が小さくなったことが、両者の間に共感的行動をつくり出しやすく、趣味や興味の共通性につながっている可能性がある。実際、50歳以下の年齢の父親をもつ学生の37%が、理想の親子関係は友だち家族と答えており、理想の第1位を占める。

一方、ほめられた記憶がないと回答した学生は、50歳以上の年齢の父親をもつ学生に多かったし、また、同じく50歳以上の男性を配偶者とする母親からも、ほめられた記憶がないと回答した学生が多かった。団塊の世代は常に競争を意識する結果、あまりほめないのかも知れない。攻撃的なのが団塊の世代の特色ということであろうか。いずれにせよ、昭和28年以前の生まれと以後の生まれでは、その気質が大きく変わっていることが明らかになったと言えよう。

しつけのあり方:当然のことであろうが、父親も母親も命令口調で子どもを叱っている。しかし両者とも、体罰は子どもに与えていない。その意味では子どものしつけは、15世紀に日本を訪れたルイス・

フロイスが見た当時同様、伝統的に言葉で為されていると考えてもよいであろう。ただ、設問 14 で理想の親子関係を尋ねているが、「友達のように対等で、常に会話がある」親子関係が男子学生で 31%、女子学生で 35%の支持を集めていることわかるように、親の前で言動に気をつける学生は少ない。父親の前で常に注意をする男子学生は 19 人(12%)に過ぎないし、母親の前では 6 人(4%)に過ぎない。

しかしそのことが、すぐに現代青年の親に対する親愛の情に反映されているとは言えない。例えば設問 12 にで得られたように、母親を愛すると言い切る大学生は 70%強でしかない。また、設問 21 では、親と友達のいずれが大切と思うかについて質問したが、父親を大切と回答した男子学生が 41%、女子学生が 44%であった。母親に対する評価もさほどに異ならず、男子学生は 46%、女子学生は 49%であった。この設問ではどちらとも言えないが、最大の回答を集めた選択肢であった。

選択肢 22 で、両親がどのくらい自分を愛してくれていると思うか、親の愛情の程度を評価させたが、父親に対しては 75%の男子学生が大変そう思うと回答し、84%の女子学生がそう思うと回答した。また母親が愛してくれていると思うという項目には 86%の男子学生が、また 89%の女子学生が、いずれもそう思うと回答した。この数値と設問 21、あるいは設問 12 の数値を総合すると、それは確かに将来の配偶者を選択しなければならない青年期特有の現象であるのかもしれないが、親を利用はするが、反対給付はこの時点であまり考えていない青年像が描き出される。

コミュニケーションのあり方: 全体的傾向として父親とのコミュニケーション量は男児に多く、母親とのコミュニケーション量は、女児に安定している。また、年齢が増加するにつれて親子のコミュニケーション量は減少するが、大学生になると回復傾向を示す。これは彼らが精神的に安定してきた証拠であろう。

男子学生が父親との間に最もコミュニケーションがあったと回想したのは、小学校入学以前であり、91.4%の学生が普通以上のコミュニケーション量と評価した。女子学生は同じ時期、その 86.3%が普通以上に父親とコミュニケーションがあったと回想した。男女の間には 5%程度の違いが見られる。小学校低学年では 88.9%の男子学生と 88.8%の女子学生が、普通以上のコミュニケーションがあったと答えている。もちろん有意差はないが、女子学生の思い出のなかでは、小学校低学年に父親とのコミュニケーションが一番多かったと回想されていることが面白い。以下、父親とのコミュニケーションは順に減少して、男子学生では高校時代に底を打つ。これに対して女子学生の底は中学時代にある。

一方、母親とのコミュニケーションはその当初、回想から見る限り男児に多い。小学校入学以前には 98.8%の男子学生が、普通以上に母親とのコミュニケーションがあったと評価しているのである。これに対して女子学生の回想ではやや少なく、94.4%が普通以上のコミュニケーションがあったと評価する。男子学生は、小学校高学年でも 94.4%が母親との間に普通以上のコミュニケーションがあったと評価している。これに対して女子学生の回想では、同じ時期に 91.3%と、やや低い値となっている。母親とのコミュニケーションが底を打つのは、男子学生の場合は高校生時代で 80.9%、女子学生の場合は中学校時代で 85.0%となる。それぞれ、現在は 85.8%と 86.3%の学生が、普通以上のコミュニケーションがあると回答している。

この数値から読みとれることがある。コミュニケーションが少なくなることは、そこに問題が発生しやすいということであり、その意味で男子の危機は高校生時代に、女子の危機は中学生時代にあることがわかる。男児よりも女児の方が身体成熟はやや早い、心理的な危機もやや早いのである。そのことは平成 14 年版青少年白書の、青少年非行の諸項目に上げられている数値からもわかる。

例えば平成 13 年度、覚醒剤に手を出して検挙された中学生は 45 名いるが、内女子が 35 名で 78% を占める。大麻は中学生 4 人が検挙されたが 4 人とも女子、またシンナー等乱用は 407 人中 190 人を女子が占める。性の逸脱行為では 1,377 人の中学生が検挙され、この年代だけで総数の 31.6% を占める。家出は中学生が最も多く、女子は 6,578 人で 59.2% を占める。まさに女子は中学生時代に危機を迎えているのである。

ところで気になる数値がある。男児と母親のコミュニケーションが、彼らが高校生になるまで、僅かとはいえ一貫して女児を上回っていることである。高校時代、一時的に低下はするものの、それでも 8 割以上の男子学生が、普通以上のコミュニケーション関係にあったと回想しているのである。母親の期待が男児に集まっていることがこういう関係をつくり出すのか、あるいは少子化でありながらも、男児の出生数が一貫して多いことであるように、家の跡取りという感覚がつくり出すものなのか、原因の特定は難しいが、母子癒着は男児に強く表れていることがわかる。

最後に、何歳まで親と寝室を一緒にしていたのかという設問 16 について、簡単にまとめておく。34.2% の男子学生が小学校入学を契機として寝室を分離している。ということは、自分の個室、あるいはきょうだいの個室をもったということである。小学校の 2~3 年生で 17.4% が、更に 4~5 年生で 11.8% が個室をもち、この時点で個室を持つ子どもは 85.7% に達する。同様に女児も、4~5 年生で 81.7% が個室をもっている。また、男女児とも小学校入学以前に寝室を分離していたと回答した者が、それぞれ 22.3% と 20.1% 存在した。生活のアメリカ化に伴って、寝室の分離も随分と早まってきたことがわかる。子どもは早くから聖域化した、自分のテリトリーをもつのであるが、このことが彼らの精神的発達に与える影響はほとんど調査されていない。今後に残された大きな問題であるといえよう。

引用・参考文献

- 中央青少年問題協議会(編). (1951). *青少年児童白書 31 年版*. 東京: 青少年問題研究会.
- 中央青少年問題協議会(編). (1958). *青少年白書*. 東京: 大蔵省印刷局.
- 中央青少年問題協議会(編). (1960). *青少年白書*. 東京: 大蔵省印刷局.
- 中央青少年問題協議会(編). (1964). *1964 年版青少年白書*. 東京: 大蔵省印刷局.
- 経済安定本部(編). (1947). *経済実相報告書. 復刻・経済白書, 第一巻, 昭和 22 年~25 年*. 東京: 日本経済評論社, 1975 年.
- 経済審議庁(編). (1953). *復刻経済白書第 4 巻, 昭和 28 年*. 東京: 日本経済評論社.
- 経済企画庁(編). (1958). *国民生活白書昭和 33 年版*. 東京: 大蔵省印刷局.
- 経済企画庁(編). (1960). *昭和 35 年度版国民生活白書*. 東京: 大蔵省印刷局.

- 経済企画庁(編). (1965). 昭和40年度版国民生活白書. 東京:大蔵省印刷局.
- 厚生省大臣官房企画室(編). (1962). 厚生白書37-人口革命-. 東京:大蔵省印刷局.
- LeVine, R. A. (1977). Child rearing as cultural adaptation. In P. H. Liderman, S. R. Tulkin & A. Rosenfeld (Eds.), *Culture and infancy: Variations in human experience* (pp.15-27). New York: Academic Press.
- 内閣府(編). (2001). 平成13年度国民生活白書. 東京:株式会社ぎょうせい.
- 内閣府(編). (2002). 平成14年版青少年白書. 東京:財務省印刷局.
- NHK放送世論調査所(編). (1979). 現代日本人の意識構造. 東京:日本放送出版協会.
- NHK放送文化研究所(編). (2001). 現代日本人の意識構造第5版. 東京:日本放送出版協会.
- 佐藤藤三郎. (1951). 答辞. 無着成恭(編), *山びこ学校* (pp.297-301). 東京:青銅社. 岩波文庫(1995).
- 莊巖舜哉. (2000). 進化論から見たパーソナリティ. 詫摩武俊・鈴木乙史・清水弘司・松井豊(共編), *シリーズ・人間と性格第1巻, 性格の理論* (pp.225-238). 東京:ブレン出版.
- 総務庁青少年対策本部(編). (1992). 中学生の母親. 「青少年の校外活動と家庭に関する国際比較調査」報告書. 東京:大蔵省印刷局.
- 総務庁青少年対策本部(編). (1999). 平成11年度版青少年白書. 東京:大蔵省印刷局.
- 総理府青少年対策本部(編). (1970). 昭和46年版青少年白書. 東京:大蔵省印刷局.
- 総理府青少年対策本部(編). (1979). 昭和54年版青少年白書. 東京:大蔵省印刷局.
- 牛島義友. (1963). 親の養育態度. 青少年問題に関する研究調査報告書第1部 (pp.5-22). 東京:青少年問題協議会.

< 付 記 >

本研究は、平成11～14年度科学研究費補助金(『文化特異的感情意識構造と「恥」の研究』, 研究代表者 莊巖舜哉 研究課題番号 11410038)の助成を受けておこなわれた。

